イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度オンライン研究会
イベント名：「パレスチナのちいさないとなみ―写真と文学・映画から」
日　　時：2021 年 7 月 22 日（祝・木）19:00～21:00
会　　場：Zoom を利用したオンライン開催
司会・登壇：嶺崎寛子（成蹊大学）、岡真理（京都大学）、高橋美香（写真家）

＊＊＊＊＊＊

嶺崎：本日はお忙しい中、「パレスチナのちいさないとなみ―写真と文学・映画から」にお越し下さいましてありがとうございます。

占領地ガザに対するイスラエルによる軍事攻撃が 5 月 21 日に「停戦」という形になりましたが、根本的な問題は何一つ解決されていない状況です。占領されたイスラエル側、そして 1967 年に占領された東エルサレム、西岸ガザ地区では、パレスチナの方々は人権を侵害される中で日常生活を送っています。占領による日常的な構造的暴力が存在するにも関わらず、メディアでは報道、反映されていません。ガザへの攻撃が報道されても、犠牲になった方々はただ数で表されるだけです。でもそこには、その一人ひとりの人生があり、大事な人がいて、大切な営みがあります。顔の見える一人ひとりとしてパレスチナの人のことを考えるきっかけになればと思い、本研究会を企画しました。パレスチナに暮らす人々の暮らしとその息吹を、写真、文学、映画の力を借りて届けていきたいと思っております。

個人的な話ですが、私は家族を事故で亡くしました。ある日突然、外的な要因によって別れが来て、朝会えた人に二度と会えなくなったという経験があります。この私の家族の事故は新聞に載りましたが、ニュースになるのは一瞬です。報道は一瞬だったとしても、日々の生活は続いていきます。東日本大震災のニュースも 3 月には毎年増えます。でも、被災した人にとっては 3 月だけのことではなく、続いていく日常です。私は仙台の出身で、住民の 5 分の 1 が犠牲になった石巻で被災して今もそこに住む従姉妹がいます。石巻で地震がある度に、わたしは従姉妹に必ず電話をかけます。地震の度に、震災当時のことを思い出し、話し相手が欲しくなるようだからです。10 年経っても余震が神経を削っていくということを見てきています。

パレスチナに関する報道も一緒だと感じます。報道は一瞬ですが、その後も人生は続いていくし、占領は続いていきます。報道されるのは劇的なことが起きた時だけですが、事件や空爆後の人々の暮らし、長い日常を生きていくというのはどういうことなのか、パレスチナで言えば、占領という非日常が起こる、異様なことが起こる、起こってはいけないことが日々起きてしまう、そうした場所で日常を紡ぐということは、当事者にとってどういうことなのか、こういったことを考える必要があるのではないかと考えています。

本日は、有事の際の報道では伝えられない、パレスチナの人々の息吹を伝えていただくために京都大学の岡真理先生、写真家の高橋美香さんをお呼びしました。岡真理先生は、現代アラブ文学、パレスチナ問題、第 3 世界フェミニズムをご専門となさっています。著書に『ガザに地下鉄が走る日』（2018、みすず書房）、『アラブ、祈りとしての文学』（2015、みすず書房）、『記憶・物語』（2000、岩波書店）等々ございます。

写真家の高橋美香さんは、パレスチナに通って現地の人々と生活を共にして、人々の暮らしを写真とエ

ッセイで伝えている方です。ご著書に『パレスチナのちいさないとなみ』（皆川万葉と共著、2019、かもがわ出版）、こちらから今回の講演会の名前をお借りしました。そして、『それでもパレスチナに木を植える』（2016、未来社）、『パレスチナ・そこにある日常』（2010、未来社）などがございます。

本日はお二人に、パレスチナの人々の暮らしについて語っていただきたいと思います。皆さまお付き合いどうぞよろしくお願い致します。

＊＊＊＊＊＊

岡：京都大学の岡真理と申します。今日は文学、アート、そして映画を通して、パレスチナで生きている小さきひとびとの生の営みを、皆さんと共有できたらと思います。

さっそくですが、皆さんは「8 月ジャーナリズム」という言葉を聞いたことがありますでしょうか。日本では、今から 76 年前のアジア太平洋戦争の記憶、広島・長崎の原爆の記憶について、毎年 8 月になるとにわかに新聞やテレビが特集を組みますが、先の戦争について私たちが想起するということが 1 年の中で 8 月しかないということを、ある種批判的なニュアンスで指し示す言葉です。

私自身、戦後の生まれですが、私が子供だった頃は、母やおばあちゃんが、戦争の時どう過ごしていたのかということを 3 時の茶飲み話で語っていましたし、当時は、アジア太平洋戦争をテーマにしたテレビドラマ等がたくさんありました。戦後の生まれであっても、戦争の記憶が身近な存在としてありました。けれども、あれから、数十年がたって、戦争の記憶が風化してしまっている中、「8 月ジャーナリズム」すらなかったらどうなってしまうのかとも思います。その一方で、そこまで記憶が風化してしまっている現代だからこそ、8 月に限定されない形で戦争の記憶を想起する、語ることが必要なのではないかとも思います。

日本のアジア太平洋戦争に纏わる記憶というものが 8 月になるとにわかに想起されることと似ていますが、毎年夏休みになると必ずホロコースト関係の映画が公開されます。少し調べてみましたら、今年は 8 月に『ホロコーストの罪人』『復讐者たち』『アウシュヴィッツ・レポート』と、3 本の「ホロコーストもの」が公開予定です。

他方、パレスチナの場合はどうでしょうか。先ほど、嶺崎さんの話にもありましたように、パレスチナの場合は、集団虐殺がない限り想起されることがないと言っても過言ではないと思います。この 5 月から 7 月までの 2 ヶ月の間に、さまざまな団体が、オンラインでパレスチナ関連のセミナーを続けざまに開催しましたが、これも、5 月に 11 日間に渡ってガザ地区がイスラエルによる大規模な軍事攻撃に見舞われた事態を受けてのことです。ガザ地区がこのような軍事攻撃に見舞われるのは 7 年ぶりのことです。7 年前の 2014 年 7 月から 8 月にかけて、51 日間に渡ってガザ地区は凄まじい攻撃に見舞われました。今回の攻撃は、2008-9 年の 22 日間に渡る最初の攻撃から数えて 4 回目になります。3 度目の 51 日間に渡った攻撃からは 7 年ぶりでした。では、この 7 年間、ガザ地区は平穏無事だったのかと言えば、決してそうではありません。

ガザ地区は 2007 年に完全封鎖され、封鎖は今年で 15 年目になります。ガザの人々はこの封鎖を「生き地獄」と呼んでいます。7 年前の 2014 年の攻撃の時、毎日のようにガザのパレスチナ人たちがイスラエル軍の攻撃によって殺されていました。一週間ほど経った頃、エジプトの仲介でイスラエルが無条件停戦を提案してきました。しかし、ハマースは 7 年間続いている完全封鎖の解除を条件としない停戦は受け入れられないと言って、イスラエルの停戦案を蹴りました。その時、日本を含め世界のメディアが、無条件停戦案を蹴ったハマースを非難しました。ハマースが、完全封鎖の解除という、自分たちの停戦条件に固執

するあまり、せっかくイスラエルが停戦を提案してくれたのにそれを蹴ったせいで、ガザのパレスチナ人が殺されていると言って。ガザのパレスチナ人の非戦闘員や子供達を殺しているのはイスラエルであるにもかかわらず、停戦案を蹴ったハマースのせいで、パレスチナ人が殺されていると言って、ハマースを非難したのです。その一週間後、ガザの市民社会の代表たちが「封鎖解除なき停戦などいらない」と題して、英語で世界に向けてアピールを出しました。封鎖解除を条件としない無条件停戦というのは結局、攻撃が始まる前の状態、つまり 7 年間続いている封鎖の状態に戻るということです。それは、我々に「生きながらにして死ね」と言うに等しく、完全封鎖の解除を条件としない停戦を受け入れないハマースはガザの市民社会を代表しているのだと世界に向けて訴えました。つまり、彼らの主張は、停戦してガザの子供たちが殺されるのを止めろと世界が要求するならば、それと同じくらい、7 年間続く完全封鎖を解除しろとイスラエル側に要求して欲しいということです。停戦後も封鎖が続くことは、「生きながらにして死ね」と言うに等しい、つまり、「完全封鎖の下で生きることは生きながらの死だ」ということです。生きながら死ぬくらいなら、今停戦を受け入れずに戦って死ぬ方を選ぶと彼らは訴えていました。それが封鎖 7 年目のときです。

あれからさらに7年という歳月が過ぎました。ガザでは、あの51日間戦争の直後から、自殺をする若者たちが増えています。イスラームでは、自殺が宗教的な最大の禁忌です。自殺した者は永遠に地獄の業火で焼かれるとされています。しかし、そのように信じる者たちが今、ガザでは、自ら命を絶っているのです。そうするしかないからです。生き地獄のようなガザで生き続けるよりも、永遠に地獄の業火で焼かれる方がましだと。中には、体に軽油をかけて自ら火を放って死ぬ若者もいます。自らの死をスペクタクルにすることで世界が注目し、この完全封鎖の暴力に対して世界が声を上げてくれるのではないかと期待してのことです。

ヨルダン川西岸地区に目を移すと、イスラエルによる占領は54年目に入ります。アイルランド議会は先般、ヨルダン川西岸地区の占領は事実上の併合であるとイスラエルを非難する決議を全会一致で出しています。イスラエルに併合された東エルサレムではユダヤ化が進んでいます。イスラエルのパレスチナ人も、ユダヤ人至上主義を掲げるユダヤ国家において「アパルトヘイト」の下に置かれています。そして、難民たちは70年以上経っても故郷に帰ることが出来ずにいます。

イスラエル出身のユダヤ人歴史家イラン・パペは、パレスチナで起こっていることは、「漸進的ジェノサイド」だと語っています。ひとつひとつの事件で殺される人の数を見たらジェノサイドとは言えないかもしれませんが、1948年の「ナクバ」以来、70年以上の歳月をかけてじわりじわりと止むことなく続いている民族浄化、「漸進的ジェノサイド」なのだと。この「ナクバ（النكبة）」という言葉をご存じない方は是非この機会に知っていただきたいと思います。アラビア語で「大いなる災厄（Great Catastrophe）」を意味します。1948 年のユダヤ国家建設に伴ってパレスチナ人は民族浄化されました。パレスチナで暮らしていた人々の 3 分の 2 以上に当たる 70 万人が（90 万人という説もありますが）、暴力的に故郷を追われて難民となりました。しかし、その民族浄化の暴力「ナクバ」は、ホロコーストのように70年前に終ってしまった出来事ではなく、形を変えて今日まで続いています。例えば、ガザが繰り返し見舞われている大規模な攻撃も、また15年間にわたる完全封鎖も、現代進行形の「ナクバ」の1つです。このようにパレスチナの人々がパレスチナで人間らしく生きることを不可能にするような民族浄化が形を変えて70年間ずっと続いている。それがパレスチナの現実です。

しかし、先ほど嶺崎さんがおっしゃったように、占領や完全封鎖といった構造的暴力は注目されません。

何年かに一度の凄まじい破壊と殺傷に見舞われて初めて、世界のマスメディアはその時だけ注目し、連日のように報道しますが、一度停戦になってしまうと、ガザもパレスチナも再び忘却の中にうち捨てられます。そうしたことが、これまでずっと繰り返されてきました。私たちがマスメディアの報道によって目にして耳にするのは、破壊されるビル、瓦礫の山、ハマースのロケット弾、イスラエルの自衛の権利、そして死者の数だけです。

私は2006年に『棗椰子の木陰で』という本を出版しました。この本の中に、タイトルの一部にもなりましたが「棗椰子の木陰の文学」という短い文章があります。その中で次のように書きました。

> ジャーナリズムは、戦争といった問題が起きてのちはじめて、それらの問題が生起する社会について伝える。だが、大切なのは、そうした出来事すべてに先立って、人々がどのようにその生を営んできたか、何を愛し、何をいつくしみ、何を大切に生きてきたか、そうした生の具体的な細部ではないだろうか。それを知らなければ、私たちは、戦争や占領が、彼、彼女らからいったい何を奪い、何を破壊したのか、真に知ることもできない。そして、戦争や占領が人間からいったい何を奪い、何を破壊したのかを真に知らないままに唱えられる『反戦』や『平和』は、それがどれだけ正しくても、抽象的なお題目にとどまるだろう。（・・・）イラクで、パレスチナで、アフガニスタンで、人々が殺されている今だからこそ逆に、文学なるものが、ほかのいつにも増して切実に求められているのだと言える。『今、ここ』の悲惨を伝えるためではなく、そうした惨禍がなかったならば、人々が送っていたであろう物語、棗椰子の木陰で愛を語りあう人々の物語や、オリーブやオレンジやレモンの木と戯れる子供たちの物語、人が生きることの哀歓を私たちに感じさせてくれるような物語が。

この文章を書いたのは、2004年の6月です。第2次インティファーダの終わりの頃です。パレスチナで、そしてイラク戦争の後で内戦になったイラクでも、アフガニスタンでも人々が殺されていた時のことです。パレスチナに関して私たちが目にするのが瓦礫の山だとしたら、私たちはその瓦礫になってしまう前のそこで、ガザの人々がどのように暮らしていたのかということを何も知らないまま、ただ瓦礫の山しか目にしません。そこで欠けているのは、私たちと同じように固有の名をもった、ひとりひとりの人間の固有の生の物語です。そうした固有の名をもった、ひとりひとりの人間の生の物語を伝えるアートや映画、そして文学について、今日はほんの少しだけご紹介したいと思います。

2000年の9月に始まった第2次インティファーダで、毎日のようにパレスチナでは誰かが殺されていました。人の命が虫けらほどの価値もないように。愛する誰かが死ぬ、という痛ましい出来事がほとんど日常となってしまい、人の死を悼んだり悲しんだりすることが人間にとって特別なことではなくなってしまった現実に抗して、ヨルダン川西岸地区のラーマッラーにあるサカーキーニー文化センターが、『100人のシャヒード、100の命』というアート展を開催しました。「シャヒード」というのは、英語の Martyr（殉難者）を意味します。パレスチナの文脈で言えば、パレスチナのために亡くなった人々のことです。この展覧会では、2000年9月に始まる第2次インティファーダで犠牲となった最初のシャヒード100人の名前と写真と形見の品を展示しました。展示された遺品は、この人はこんな無残な殺され方をしたというような「死」を伝えるものではなくて、この人はこんなふうに生きていたという、「生の記憶」「生の物語」を伝える思い出の品です。それらは、まるでプレゼントのように、リボンをかけられ、アクリルケースの中に入れた形で展示されました。このアート展は、2003年8月から10月にかけて、『シャヒード、100の命

―パレスチナで生きて死ぬこと―』（以下、『シャヒード、100 の命』）と名付けられ、東京、京都、沖縄、松本、大阪の 5 都市で開催されました。今表示しているのは東京のキッド・アイラック・アート・ホールで開催された時の写真です。

公式サイト：http://www.shaheed.jp/index.html

このアート展のために日本で作られた図録は、以下のように構成されています。シャヒードとなった人の固有名がアラビア語、日本語、ローマ字で表記されていて、遺影、形見の写真が載っています。そして遺影の下には、その人の思い出の物語が日本語と英語で載っています。なかには、遺影にする写真すら残されていない人もいました。身分証明書の写真が代わりに収められた人もいますし、それすらない人も何人かいます。

ちなみに、2021 年 7 月 23 日に開催される東京オリンピック開会式の演出家が、ホロコーストを揶揄するようなコントをかつてやっていたということで、解任される事態になりましたが、それに対して、サイモン・ヴィーゼンタール・センター（Simon Wiesenthal Center）が非難声明を出しています。サイモン・ヴィーゼンタール・センターと言えば、『マルコポーロ』という雑誌に「ホロコーストはなかった」と書いた記事が掲載された時も批判を展開して、結果的に『マルコポーロ』は廃刊になっています。私は『シャヒード、100 の命展』実行委員の一人でしたが、このアート展を開催する時に、サイモン・ヴィーゼンタール・センターがこれはテロリストを称賛する企画だと介入してきました。その結果、協賛いただいていた複数の日本企業から、助成金は返さなくてよいからスポンサー欄から名前を削ってくれという連絡がありました。ただ同じくスポンサーになっていただいた立正佼成会は、私たちは正しいことをしていると信じているという返答があり、何らそうした措置はとりませんでした。

アメリカの場合、プロ・イスラエル、プロ・シオニズムの政治団体の圧力が強いために、記者やキャスター個人の見解はどうであれ、The New York Times や CNN といった主流のマスメディアが、パレスチナ側の死を悼むといった論調を展開することはありませんでした。しかし、今回のイスラエルによる攻撃を受けて、そうした主流マスメディアが堰を切ったように論調を変えています（このことについて『週間金曜

日』の 7 月 2 日号に拙論を寄稿いたしましたので、ご関心のある方はお読みいただければ幸いです)。The New York Times が、一連のイスラエルによる攻撃で亡くなった 60 名以上のパレスチナ人の子供たちの写真をこのように一面で載せたというのは、そうした論調の変化を大いに物語っております。それだけではなく、その中面でも、1 人ひとりの子供の名前と、どういう家の子で、どのように亡くなったのかというストーリーまで掲載しています。

続いて、映画をご紹介します。パレスチナ映画ではイスラエルのパレスチナ人映画監督であるハーニー・アブー・アスアド監督の 2 作品がアカデミー賞の外国語映画賞候補になりました。1 つ目は、『オマールの壁』(*'Omar,* 2013) アラビア語のタイトルは、「オマル」で、主人公のオマルという青年の名前が映画のタイトルになっており、ここも、固有の生の物語への眼差しという意味が非常にあると思います。イスラエル占領下のヨルダン川西岸地区における人々の暮らしの状況を、オマルという一青年の生を通して描いた作品です。

そして、同じくアスアド監督作品で、アカデミー賞候補になった『パラダイス・ナウ』(*Paradise Now,* 2005) は、ハーリドとサイードというヨルダン川西岸地区のナブルスという街に暮らす 2 人の青年が、第 2 次インティファーダが起きていた時期に自爆テロを決行する使命を担った 48 時間を、2 人の葛藤を通して描いた作品です。

続いてご紹介するのは、レバノン在住のパレスチナ移民 2 世の女性監督、メイ・マスリ監督が制作した『夢と恐怖のはざまで』(*Frontiers of Dreams and Fears,* 2001) という作品です。ヨルダン川西岸地区のベツレヘム近郊にあるデヘイシャ難民キャンプに暮らすマナールという 14 歳の少女と、レバノンのシャティーラキャンプに暮らす、やはり 14 歳のモナという少女、この 2 人を主人公にしたドキュメンタリー映画です。いずれも難民 3 世として 1 人はイスラエル占領下、もう 1 人はレバノンという異邦に暮らしている難民の少女たちの交流を通して、難民であること、占領下のパレスチナで生きること、異邦で難民として生きることの困難と闘いと希望を描いています。

私の専門は文学です。先ほど『棗椰子の木陰で』の文章を引用しましたように、文学作品とは、かけが

えのない固有の存在としての人間の生の営みを伝えるものです。では、今回どのような文学作品をご紹介しようかと考えた時に、思い浮かびませんでした。なぜかと言うと、とりわけ純文学になればなるほど、文学作品として難解なものになります。パレスチナ問題に詳しくない方が読んだ場合、等身大の人間の共感可能なものが描かれているかというと、必ずしもそうではない。その点は映画も同じで、十全に理解するためには、彼らが置かれた時代や社会の詳しい解説が必要になりますが、それでも映画であれば、具体的なイメージが視覚的に提示されますので、解説がなくても目の前で生き生きと動いている生身の人間に対して共感を抱くというのは比較的容易だと思います。一方、文学作品は、行ったこともない土地は想像しようと思っても難しいと思います。それで、小説ではない形で、小さきひとびとの固有の生に触れる文学的なものをご紹介したいと思います。それが、“We Are Not Numbers”(https://wearenotnumbers.org/)というプロジェクトです。“We Are Not Numbers”で検索していただくと、ウェブサイトが出てきます。パレスチナ人の若者たちがニュースの中で数に還元されてしまう、そうした数の背後にある「人間の物語(human stories)」について、彼ら自身が綴ったエッセイを掲載するサイトです。ガザ地区やパレスチナ西岸地区の若者たちが英語で書いた文章を投稿すると、その文章を Mentor と呼ばれる英語ネイティブが添削します。それによって彼らの英語も磨かれますし、また自分が書いた文章を通じてパレスチナの人間の物語というものを世界に届けることができます。

今日は最新の投稿 2 つをご紹介したいと思います。1 つ目は、マラハ・ヘルズッラーさんが書いた「閉じた目を開けて歩くこと (Walking with closed eyes open)」という文章です。作者のマラハ・ヘルズッラーさんは、ヨルダン川西岸地区にあるビールゼイト大学を卒業されていて、英語、英文学を主専攻とする傍ら、翻訳論や国際関係論も副専攻として修めている方です。この方はアミーラ・アブアルクーブさんというお友達を主人公にした文章を書いています。翻訳したものがありますので、読み上げさせていただきます。

ティップ、タップ、ティップ、タップ、優しく、毅然と、着実に。

アミーラ・アブアルクーブは、ビールゼイト近郊の狭い石畳の路地を堂々と歩いて行く。白い杖を頼りに、その忠実なガイドを右、左、右と叩きながら、古くから保存されている通路の表面を発見していく。彼女の動きは、その想像的な頭脳が自らのイメージを描き出したり、その長い巧みな指先が大学の図書館の本を優雅にスキャンしたりするのと同じだ。通りを歩き回っていると、野生のライムやセージの香りや鼻孔をくすぐる。自家栽培のミントの香りは心を温め、寒い冬の夕べ、家族の集いにお茶の準備するパレスチナの祖母たちのしわくちゃの手を思い出させてくれる。

カフエに足を踏み入れたアミーラは、入り口のアーチにぶつからないよう頭を下げ、右手に店のファサードに吊されたきれいな植木鉢や陶器の壺が並び、左手には手すりの巻かれた色とりどりの電飾のある階段を上っていく。気づけば、彼女はモザイク模様のあるテーブルの上で手を動かして、花に触れている。彼女は熱くて甘いミントティーを飲む。すぐに人々が彼女を取り囲んでせがむ。「アミーラ、歌をうたって」。私は、友人が満面の笑みを浮かべ立ち上がり、歌を歌うのを見つめる。心に染み入るような彼女の声が部屋に響き渡る。

アミーラと知り合って 4 年になるが、彼女の決断力と、人を鼓舞する彼女の力にはいつも感心させられる。目が見えないことがどんな感じなのか、彼女は素晴しく独創的なやり方で私たちに教えてくれる。ある時は、「目を瞑って歩こう」というイベントを企画して学生たちに目隠しをして歩かせ、彼女の立

場を体験させた。私たちにとっては簡単で当たり前なことでも、目の見えない人には実に困難なことなのだということを多くの者たちが理解するようになった。

アミーラはまた、目の見えない友人たちに対し、外に出て、生き生きと大学生活を楽しんで欲しい、怖いからと言って部屋に閉じ込もらないでほしいと訴えた。彼女は目を閉じている学友たちの小さな世界を開こうと奮闘し、彼らを閉じ込めている固定観念の枠の外にある大きな世界を探求しようと呼びかけた。彼女の働きかけによって、彼らが少しずつ、しかし着実に、自分たちの居心地のよい場所から外に出て、広い世界と積極的に関わるようになった時、彼女は大きな一歩を踏み出したと感じた。

エルサレムにある、ヘレン・ケラー盲学校は、彼女が自分の個性を受け入れるための「いろは」を学んだ場所だ。白い杖を使って自立のための小さな一歩を踏み出したのも、この学校だった。そのおかげで彼女は、世界を探求する準備ができた。もっと知りたい、もっと大きな世界の一部になりたいという好奇心が芽生えたのだ。この世界に帰属したいと。しかし、自立のきっかけとなった白い杖は逆に、他のコミュニティに対して、そこに帰属しない者として彼女の存在を示すものでもあった。彼女はその壁を壊したいと思った。

彼女は今でも、盲学校を出て普通中学校に行った最初の時のことを覚えている。恐怖と興奮、緊張して母親の手を握り絞めながら、これから 1 人で立ち向かう困難に心臓が高鳴っていた。新しいクラスメイトはどのように接してくるだろうか。自分に視力がないことを理解してくれるだろうか。彼らが交代でノートを取ってくれたり、録音してくれたりして、彼女はとても嬉しかった。だが、彼女が重荷になっているのではないかと思うこともあった。例えば、ある生徒が他の生徒に、どこかに連れてってやってと頼んだりするのを聞くと、まるで自分が買い物袋やチョコレートバーのように物扱いされていると感じたものだ。「はあ」とため息をつかれる度に自分が他の者とは違うのだと思い知らされた。

そうした困難に直面したとき、周囲の人たちが慎重であったり、時には意地悪でさえあったりするのは、目の見えない人の気持ちを理解していないからだと理解するようになった。彼女は目が見えないことを哀れむのではなく、理解してもらいたいと思った。盲目であることを人々が受け入れるだけでは不十分だ、自分にはもっと大きな役割があると彼女は考えた。より共生的な世界を創りたいという情熱でアミーラは自身の企業プロジェクトを立ち上げ、それがきっかけとなってアル＝ジャバル・インキュベーターというプロジェクトに参加することになった。特別なニーズを持つ人々をパレスチナ社会に統合することを目的とするパレスチナの財団を設立する、それこそがアミーラの夢の核心をなした。

この財団では、子供たちが特別なニーズを持つ者たちに対してどのように接したらよいかを理解し、彼らに共感できるようにすることを目的としている。その粘り強さと洞察により、彼女はチームと協力して、子供向けのオーディオブックや展示の図書を作成し、子供たちが地域社会で十分に活動できるようにしている。また、この財団では、障害のある若者が雇用可能なスキルを身につけるトレーニング・プログラムも提供している。

窓越しに、バスから降りてくるアミーラの姿が見える。自信と確信に満ちた姿が。ティップ、タップと白い杖を巧みに動かしながらラーマッラーの雑踏を歩いて行く。目の見える者たちの間を縫って彼女は我が道を進む。目を閉じて生活しながら彼女は自分の歩いている道の美しさを誰よりも堪能している。ティップ、タップ、左、ティップ、タップ、右……

以上が、マラハさんが友人のアミーラさんについて書いたエッセイです。アミーラ・アブアルクーブさ

んのフェイスブックでは、若い世代に向かって、社会活動、ボランティア活動をしようと訴える彼女の姿を動画で見ることが出来ます。

続いては、イスラ―・ムハンマド・ジャマールさんという女性が投稿した文章を紹介します。ガザの次世代を担う医師たちの闘いについての文章です。筆者のイスラ―・ムハンマド・ジャマールさんは 5 人のお子さんがいらっしゃるそうなので、おそらく 20 代後半から 30 代前半の方だと思います。

「なぜ、そんなにお金のかかる専攻に娘を入学させるの？！私の娘だったら絶対に医学部なんかに入れたりしないわ」。アシール・アブーナダーの母親は、娘のアシールが医学部への進学を決めてからというもの、そう言われ続けてきました。その理由をアシール自身もよく分かっています。「家族はこの 6 年間、私の学費を払うために大変な苦労をしましたが、それでも足りませんでした。私は大学に 2470 ドルの借金があります。これまで、学位取得のために一生懸命頑張ってきましたが、この借金を払わなければ学位を取得することが出来ません」

ガザ・イスラーム大学では 2015 年から 123 名の学生たちが、医師になるために勉強してきましたが、うち 73 名が授業料を全額支払えていないために卒業できないでいます。アシールはその 1 人です。ガザ・イスラーム大学の医学生組合は彼らを支援するために 3 万ドルを目標とするクラウド・ファンディングのキャンペーンを始めました。組合のキャンペーンのサイトには、こう書かれています。「73 名というのは、単なる数字ではありません。学生 1 人ひとりに、厳しい経済状況のために子供たちの教育費を賄うことが出来ず無力のまま立ちすくんでいる家族とその苦悩の物語があります」

アシールは、同じく医学を専攻する 2 人の弟たちを含む 8 人家族で暮らしています。大きな負担にもかかわらず、母親は一貫して子供たちが夢を実現しようと努力するのを支援してきました。長女であるアシールは、特別な責任を感じています。家庭の経済的なことに関してだけではありません。政府の診療所で看護士として長時間働いている母親の目の病気の治療法を見つけるために自分の技術を使わなければならないということについてもです。アシールは、大学の学位を取得したら 1 年間のインターンシップと 5 年間の眼科の専門教育を受けなければなりません。

「初日に学生課に行って大学が提供している奨学金について尋ねた時のことを今でも覚えています」アシールは振り返って語ります。「大学には、そのために資金が残っていませんでした。イスラエルのガザへの大規模な戦争から、まだ 1 年しか経っていない時のことですから」

今、ガザはイスラエルとの新たな戦闘をなんとか切り抜けたばかりで、保健分野は大きな打撃を受けています。パレスチナの保健大臣の報告によれば 89 の治療施設と救急車が攻撃され、多くの看護師と医師が負傷し、医師が 2 人死亡しています。アシールと彼女のクラスメイトが医師として活動することは、なんとしても必要です。

私は、ガザ・イスラーム大学医学部 4 年のオマル・リアド・アル＝ナッジールにインタビューしました。オマルは、アシールやそのクラスメイトたちの学費を救済するためにイニシアティブを取っています。

「一般的な医学の学位を取得するには 6 年間学ぶ必要があります。年間 4,000 ドル、6 年間で 24,453 ドル払う必要があります。その他にも、教科書代、医療機器代、通学のための交通費代がかかります」

「中央統計局によるとガザの失業率は現在 49%です。多くの親が無収入です。働いていたとしても、その収入はわずかです。国連の報告によると、ガザの平均所得は年間約 2,000 ドル、授業料の約半分で

しかありません。社会問題省の報告によれば、貧困率は 75%に達し、34%が極貧ラインを下回っています。世界で最も高い数値です」

「授業料をまだ全額払えていない 73 名の卒業生は平均で 1 人 3,500 ドルの借金を背負っています。彼らの借金を全て支払うには、258,000 ドルが必要です。借金を背負っている限り、彼らはパレスチナの医療システムに登録して診療を開始することはできません。彼らは 7 月 5 日に卒業する予定でした。」

その 1 人、イヤード・ハイダル・アル＝バスースは、7 人家族。妹も資金が集まれば医学部を卒業予定です。イヤードは、2013 年、イエメンで医学の勉強を始めましたが、イエメンが内戦になったため 1 年半後ガザに戻ってきました。

幸いなことにガザ・イスラーム大学がイヤードを受け入れてくれました。当初は学費をやりくりすることが出来ましたが、ガザの経済が悪化するに伴ってイヤードの経済状況も変わりました。

「4 年生になってからは、親戚や友人からお金を借りなければならなくなりました。それでも 4,000 ディナール、ドルにして約 5,600 ドルの借金があります。我が家にとってはとてつもない額です」。イヤードの父親はパレスチナ自治政府に勤めています。自治政府とガザを統治する政権との対立のせいで、自治政府の職員である父親は、給料の 70%しか受け取ることが出来ないでいます。

レハーム・イマード・アル＝ズムトはもうすぐ母親になります。7 年間の学業を終えました。「大学では当初、健康科学を専攻していましたが、クラスで 2 位になるほどの成績を修めたため、医学部に編入しました。1 年目と 2 年目は奨学金をもらっていましたが、試験が段々難しくなって、奨学金の受給資格がなくなりました。わずかですが学費を払ってしのいでいましたが、卒業するためには 4,000 ディナールの授業料を払わなければなりません。夫は定職に就いていないので、私にはとても支払えない額です」

アラー・アル＝アッカードは 10 人家族です。イヤードと同じく、アラーの父親もパレスチナ自治政府で働いています。そのため給料を全額受け取ることができません。

「2015 年に高校の成績が発表され、僕はこれまで夢見てきたこと、つまり医師になることを考え始めました。海外に行ければと思っていましたが、奨学金はほとんどありませんし、仮に奨学金を得られたとしても、ガザの検問所は閉鎖されていて、ほとんど開きません。唯一の解決策が、ここ、ガザ・イスラーム大学で学ぶことでした」。

アラーは在学中、ガザの医学雑誌に携わるほど活躍しました。「でも今、卒業試験を目前としながら、未納の学費が累積しているため、試験を受けられないでいます。兄弟の 2 人は学費が支払えずに 1 年で大学を退学しました。僕たちは皆、同胞のために医療活動をするという夢をこの 6 年間死に物狂いで追い求めてきましたが、今やそれが無駄になってしまうかもしれません。でも、僕たちは希望を捨てていません」。

私の話は以上です。ご静聴どうもありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊

嶺崎：続きまして、高橋美香さん、どうぞよろしくお願いいたします。

高橋：皆さんこんばんは。最初にこの話をいただいたとき、研究者の皆さんとか先生方とか、私よりよほどパレスチナに詳しい人がいらっしゃる中で私が伝えられることが本当にあるのだろうかと、躊躇してしまいました。でも嶺崎先生が最初にお話しされたように、ご家族を亡くされる過程で、一人一人が数じゃないということを思い知ったというご経験と、「一般の方とか学生さんに向けてパレスチナの人々が数じゃないということをそのまま話してもらえればそれでいいから」と言われて、「それなら私にも話せるのでは」と思って引き受けました。

今日は、私が居候を続けている西岸地区の一番北部にあるジェニンという難民キャンプのある家族の話をしたいと思います。ジェニンの難民キャンプに行ったときに、最初に見かけたのが、「忘れないために」と書かれた壁画でした。これは難民となったことを「忘れないために」、また、ここで 2002 年にイスラエル軍の侵攻があり虐殺が起きましたが、そのことを「忘れないために」、など、いろんな意味が込められていると思います。2002 年当時、軍事侵攻があったときに、一番ひどくやられたのがハワースィーン地区だと聞きました。虐殺・軍事侵攻から 7 年が経ち、一見したところ瓦礫もなくアラブ諸国の援助によって街や難民キャンプもきれいになっていて、その「傷跡」はわかりませんでしたが、その時の瓦礫を使って作ったモニュメントもありました。

その周辺で「当時あったことを聞かせてほしい」と、キャンプの周辺に人を見つけてはお願いをしましたが、「お前なんかに話すことは何もない。世界はあの時何もしてくれなかったじゃないか。いまさら7年たってお前に話して何になるんだよ」という結構厳しい言葉をもらいました。パレスチナやアラブのいろんな国に行かれた経験がある方はお分かりになるかと思いますが、ほんの少しアラビア語ができるだけで、もうみんな、すごいにっこりして、大歓迎してくれます。「お茶飲んでいけ」「ご飯食べていけ」「ちょっと座っていけ」「ジュース飲んで行け」と歓迎してもらえることが多いのですが、この時はアラビア語が僅かなりとも理解できたことを後悔するくらい厳しい言葉をいろいろ言われました。子供たちに石は投げられるわ、鞄は蹴られるわ、たぶん周囲の大人たちの厳しい顔や厳しい言葉を聞いて、子供たちもそういう気持ちになったのだと思います。それで、もう散々な気持ちになってしまって、このジェニンの難民キャンプというのが最北で西岸地区で最北部にあって遠い、ということもありますが、なんとなく足が向かわないまま 3 年が経ちました。その時にただ一つだけ楽しかったというかほっとした思い出は、この時「難民キャンプもう無理だ、もう帰ろう」と思ってぶらぶら歩いていたところ、二人の子供たちに出会いました。一人の子が私に向かって、「どこ行くの」と聞いてきて、「どこ行くってもう帰るんだよ、エルサレムに帰る」「バス停に向かって歩いているんだよ」と返事をすると、「ねえねえ時間ないの？ちょっと人形劇見に行こうよ」と言われました。その人形劇をやっているところがこのジェニンの中にあるフリーダムシアターという、イスラエル人のアルナ・メール（またはメイア）さんという方が難民キャンプの子供たちのために作った劇場で、「そこで人形劇があるからちょっと見に行こう。チケットあげるからさ」と言われてしぶしぶというか、とぼとぼついていったのがこの劇場でした。その日すごく辛い言葉を投げかけられて、「アラビア語なんて理解できなきゃよかった」と思ったのですが、その時に子供たちがこの劇場で人形劇を見て大笑いしていた、そういう思い出が唯一心に残る思い出で、その記憶があったからこそ、何とかまたいつかまた行きたいなと思うことができました。

それから約 3 年後、人形劇を見たフリーダムシアターに行く機会がありました。そこで演劇をしていたのがカマールという青年で、このカマールの家に泊めてもらうことになったのが、この一家との出会いでした。このカマールの家にさっそくお邪魔してみると、お父さんとお母さん、左側がカマールで、真ん中

がお父さん、アブー・カマール、右側がカマールのお母さん、まあイム・カマールと呼ばれていますけれど、彼女の名前はマハと言います。マハがさっそく食事を用意してくれて、寝るころになるまで何時間か話をして弟たちも帰ってきて過ごしてゆく間に、なんかおかしいよなということに気づきました。

お父さんがこの写真の通り、頭を抱えてずっと下を向いて、一言もしゃべらずにうずくまっていて、さすがにご本人が起きてらっしゃるときに聞けないので、ご本人が寝静まった後にマハに聞きました。「ねえねえ、旦那さんどうしたの？」そうすると教えてくれたのが、2002 年のイスラエル軍の軍事侵攻があったときに、ファタハの地域のまとめ役をしていたということで、彼も当時30代半ばだったのですけれど、目を付けられて、連行されて、暴行を受けて、捕まっている間には拷問も受けて、頭をひどく殴られたという話を聞きました。それの影響か、帰ってきてから徐々に体調を崩すようになってしまって、9 年後の 2011 年にはもう自分の足で立つこともほとんどしゃべることもできなくなっていました。この時まだ 44 歳でした。自分の足で歩くこともできないので、奥さんのマハが、自宅で散髪と髭剃りをしてあげている、そういう様子です。難民キャンプの中で一緒にこの一家の元で暮らしている中で印象に残っているのは、パレスチナの農村と違って、耕す畑がない、日々の収穫物を得ることもできない、何をするにも金がかかるということです。もちろん農村に行けば、小麦があれば自分たちの家のかまどでパンを焼いて畑から野菜をとって食べるものを賄ってという生活ですが、難民キャンプにはそういう場所もないのでできません。男性ですら失業している人が多いのに、ましてや一家の大黒柱であるアブー・カマール―彼の名前はイマードといいますが―、イマードが働きに行くこともできない。奥さんのマハは彼の介護をしながら、6 人の子供たちを育て上げながら、一家の大黒柱として働かなければいけない。しかも彼女は小学校しか出ていないのです。字の読み書きはかろうじてはできるけれど、それを仕事にするほど得意ではなく、読んだり書いたりするのにすごく時間がかかります。ですので、そういう事務仕事にもつけない。だとしたら何ができるかと考えた時に、自分の体を動かして働く日雇いの仕事しかできないということで毎日この当時は農作業に出かけていました。ですがこの農作業は、日雇いなので毎日必ず仕事があるという訳ではありません。そんな中で、当時30円程度の一シェケルが落ちてないかと毎朝それを探している声で目が覚めるのですが、その時はとうとう落ちていなくて、誰のポケットにも入っていなくて、仕方なく親戚にお願い

して分けてもらった小麦に塩とかザアタルを練りこんで揚げパンを作ることもありました。

当時頻繁にもらっていたのはトマト農場の仕事で、私も取材撮影と称して一緒に行って働いていました。トマト農場で農作業しました。というのも、毎朝のように「あと一シェケルあと30円あったら朝ごはんのパンが買えるのに」という会話が頭上で飛び交っていて、私が「一シェケル持っているよ、これでパン買っておいでよ」って差し出すと、「お前は黙って寝てろ、美香からは受け取れない」とぴしゃっと毎朝言われて、受け取ってもらえませんでした。「どうすれば毎日私も食べているしいろんなものもらっているし、飲んでいるし、そこの一家にお返しができるのかな」と考えたところ、とりあえず目の前にマハが仕事に行っているトマト農場がある、農作業がある、だったらマハが収穫をすればするほど、草取りをすればするほど、仕事が楽になる、早く終わる、たくさん仕事ができれば多くお金がもらえるということで、それを手伝おうと思って、撮影と称して毎日毎日農場に行って働いていました。それが何日も何日も続くと、とうとう腕も上がらなくなってしまって。ずっと頭上を向いてトマトの蔓を結びなおす作業もありました。それと、いらない葉をハサミでずっと剪定する中でとうとう腕も上がらなくなって、高熱を出して寝込んでしまうことになりました。夜中にふと熱が出て目が覚めて、マハの布団を見てみると、マハも「あぁ腕が痛い、ああぁ疲れた、あぁ眠れない」と呻いていました。ですから、同じようにしんどい思いをしているのですが、私は熱が出れば「そこで寝てな、一日ゆっくり寝てな」って言って皆にレモネードを作ってもらったりお茶を入れてもらったり、おかゆみたいなリゾットみたいなものを作ってもらったり寝ていることもできますが、マハはどんなに苦しくても朝になれば、みんなを食わせるために仕事に行かなくてはならない日々がずっと続いていました。

次男のムハンマと友達のマジドは一番の仲良しで、同い年の幼馴染で、どこに行くにも一緒、あまりに仲がいいから職場まで一緒ということで、毎日毎日家に帰ってきてからもお互いシャワーを浴びてまた二人で待ち合わせてどっか行ってお茶を飲んだり遊んだりしているという、それぐらい仲が良かった二人でした。ところが2013年にマジドが殺されてしまいました。イスラエルの報道なんかによると、テロリストを殺したと言われていますが、マジドは戦闘員として銃を手に取っていたわけではありませんでした。ジェニンの難民キャンプにイスラエル軍が侵攻してきたときにみんなが「何が起きているんだ、なんだなんだ」と駆けつけて、イスラエル軍のジープや兵士に向かって投石することもありますが、話によるとそれすらもしておらず、「なんだなんだ」って見に行ったところ巻き込まれて撃ち殺されたそうです。同じ2013年に今度はマハの夫アブー・カマールも病気がちのまま、どんどん弱ってしまって、最後は何にも食べられなくなってしまって、まさに骨と皮だけになってしまって、回復することなく亡くなっていきました。その当時にちょうど私はもう一つの居候先、同じ西岸地区でラマッラーの近くにあるビルインという農村で、ずっとオリーブの収穫の様子を撮影していました。すっかりジェニンの難民キャンプにたどり着くのが遅くなってしまい、その間にイマードが亡くなってしまいました。

ちょうどその農村でオリーブの収穫作業を延々と手伝いながら撮影をしていましたが、そこでどれだけしんどい作業であっても、そこには喜びがありました。一家全員で集まって収獲して、取れたオリーブを塩漬けにしたり、搾油して油に変えたりする。そういうしんどい中にも喜びの時間というものがありましたが、同じ時期に難民キャンプに行ってみると、マハはオリーブの実を拾っていました。これは彼女の畑ではもちろんなくて、彼女の境遇を知る畑の持ち主の方が、「あぁじゃあうちで落ちている実だったらどうぞ拾っていって」ということで拾わせてくれる、という場所でした。それで三男のジャマールと一緒に地表に生えている棘に刺されながら延々と地表に落ちている干からびた実を拾う、それが故郷を失ったと

いうこと、収穫ができる畑も収穫できる木も失った、それが難民ということなのだということをその時初めて、私も棘に刺されながら、干からびた実を拾いながら体で感じることができました。

これは一家の居間兼食卓兼寝室です。全てをこの部屋でまかないます。夜になるとこんな風にみんなで雑魚寝をします。この写真を撮った場所、みんなを見下ろしているこの場所がだいたい私のいつもの寝床で、布団だけが残っていて、抜け出た後があるところが母マハの寝床です。末っ子の左上のエリアと右上に三男のジャマールと、真ん中に次男のムハンマドが寝ています。多分ムハンマドは夜中遅くに帰ってきて、おなかがすいてきゅうりを食べていたのですが、力尽きて寝ています。この時ムハンマドの中で何が起きていたかというと、親友の幼馴染のマジドを失って全然笑わなくなってしまいました。家族にいろんなことを聞かれたり、詮索されたり、話しかけられることすら苦痛だったようで全然家にも寄り付かない。夜中にそっと帰ってきて、こんな風にきゅうりをかじって力尽きて眠る。朝は仕事に出かけてゆく、でも全然家に帰ってこないというようなことが続いていました。これは2014年の写真です。それからさらに一年がたった頃、この時もマハは日雇いの農場の仕事をずっと続けていました。この時私も一緒になって、レタスの草取りを行っていました。水で洗っても洗っても、毎日毎日こういう作業をしていると土が手にこびりついて取れなくて、私とマハはお互いの手を見ながら「もうこれはちょっとね」と力なく笑ったことを思い出します。「これじゃ恋もできないよね」とマハが冗談で言っていたのも思い出します。「男の人に見せられないよ、こんな手」とかって言っていたのも思い出します。それぐらい毎日の作業は過酷でした。

マハの近所にはサミーラという豪快な女性がいて、子供は男の子が三人います。夫が浮気性で、しょっちゅう第二婦人候補みたいなのを連れてくるということで、「お前なんかいらない。お前なんか稼ぎがないくせに偉そうにするな」と言って、サミーラは夫を追い出しました。「第二婦人でも何でもいいからそこに行け」と言って。そのあとその夫はどうなったか知らないのですが、サミーラはすごい料理が得意な人だったので、さっそく息子たちも一緒になって料理のケータリング・サービスを始めて、大人数、例えば「何月何日の何時までに何人分のこういう料理を料理してくれ」という電話かかってきたら、「よっしゃ合点」って電話で受けて、その料理を用意して、届ける、はたまた取りに来てもらうという仕事を一人

でしていました。あまりにも注文の量が多いときは、近所の人たちにヘルプの声がかかります。「マハ、ちょっと手伝ってよ。どうせ暇でしょ。どうせ今日仕事ないでしょ。」ってサミーラが、大きな野菜が大量に入った袋を持ってきて、マハと近所のおばちゃんたちがその辺の葉っぱをひたすら一枚ずつ落としているということもありました。ちなみにサミーラは本当に豪快な面倒見のいいおばちゃんで、すごく愉快な人ですが、大量に作ったお客さん用のスープを手伝ってくれた皆にも分ける、ちょっとしたお金もそこから支払うということで、みんなに一生懸命還元しようと努めたりもしていました。夫を追い出したり夫を亡くしたり色んな境遇の女性がいましたが、辛いこともたくさんありますが、そうやって生き生きと自分のできることを探して一生懸命生きているマハやサミーラの姿が印象的でした。

2014 年には、農場での仕事もなかなか入ってこなくて、とうとうこの時期は何にも食べるものがなくなってしまって、お金も尽きてしまって、親戚から届けられた塩漬けのチーズをひたすら毎食毎食これを油で揚げて、パンだけはかろうじて買ってきて食べるという、そんな塩チーズを揚げているマハの様子です。

2014 年私にとって一番衝撃的だったことは、ハムザが殉教者として死んでいったことでした。ハムザの何が印象的だったかといえば、トマト農場で私たちが働いていた時期にハムザが毎日仕事帰りにこの家に立ち寄って、ある日、いつも私に向かって「バンドゥーラ、バンドゥーラ（トマト、トマト）」と言うのです。あいさつ代わりのように。朝は「サバーフルヘイル」の代わりに「サバーフルバンドゥーラ」と言って、「こんにちは」の代わりに「バンドゥーラ、美香バンドゥーラ」という嫌がらせのように言っていたそんな愉快な奴でしたが、そんなハムザが戦闘員となって死んでいきました。彼はもう死ぬことを覚悟していたのだと思います。「自分が死んだら難民キャンプの皆に自分のことを忘れないで」ということでチョコレートが配られるように手配をして死んでいったということを聞きました。マハも「ハムザからのチョコレートを受け取った」と言っていました。そんな愉快な奴が、私には気づけなかった部分ですが、戦闘員として死んでいくことを選ぶほどの、なんて言ったらいいんでしょうか、絶望なのか、死ぬことで次世代というか誰かに自分の希望を託すのか、それはちょっとハムザとその話をしたことがなかったので結局わからずじまいですが、そういう風に死んでいった青年がこの一家の兄弟たちの幼馴染です。この時に私は日本の皆さんから、農村でオリーブの木を植えようということを呼びかけて預かっていたお金が結

構ありましたが、農村でうっかり植えてしまうと村中が嫉妬の嵐でとんでもないことになるので、村中に声をかけて、村中に植えられないならかえって植えない方がいいということで、なかなかそれを見極めて親しい村であればあるほどできず、どうしようと途方に暮れていた時期でした。この時ハムザが死んでいったことを私に話してくれた兄弟たちが、ハムザが死んでいったときのずたずたになって滅多撃ちにされてもうズタズタのぼろ雑巾みたいな状態で血まみれの中で横たわっているハムザの遺体も見せてくれましたが、その兄弟たちはその写真を削除することもできないでずっと持っています。その写真を見せてくれながら、私がボロボロ泣いてしまったときに、兄弟たちが「美香泣くな、喜んでやれ」と言うのです。「ようやくハムザは天国で安らかなひと時を迎えられているんだから、泣かないで喜んでやれ」と言ったんです。「順番が来たら俺たちも行くよ」と兄弟の一人が言いました。それが直接どういう意味だったのかその時はとても問いただすことも聞くこともできなくて、結局その後もその言葉について兄弟たちに聞くことはできていませんが、それほどの絶望感とか閉塞感とか出口のない感じ、仕事はないお金もない、狭い難民キャンプに押し込められて、抵抗すればハムザのように死んでいくしかない、また抵抗しなくてもマジドのように巻き込まれて殺される、石を投げれば殺される、カマールも実際にこの後、投石をしたという罪状で一年半刑務所に入れられました。そんな状態の中で、「本当にオリーブの木を必要としているのは実は難民キャンプの皆なんじゃないかな」と、ふと思いました。ここではカマールの一家とせいぜい幼馴染たち、カマールやその男兄弟四人いますが、四兄弟の幼馴染くらいしか付き合いがなかったので、村中皆が知り合い、難民キャンプ皆が知り合いということもなかったので、「ここで植えたらいいのではないか」と、ふと思いました。ただ彼らはオリーブの木を植えた経験もありません。だからうまくいくかもわかりません。オリーブの木を植えようにも、もう裏庭が全部がれきの山でした。まず瓦礫をかたづけて、ごみを取り除いて…。私、ネズミがこの世で一番苦手なのですが、ネズミが走り回るたびに「ギャー」って難民キャンプ中に響き渡るかのような大声で叫びながら一生懸命がれきを片付けました。というのも最初オリーブの木を植えようよって兄弟に言った時に、誰一人として、フンって鼻で笑って「こんな瓦礫の中でどうやってやるんだよ、お前ひとりでやれよ、勝手にやれよ」と言われて手伝ってくれませんでした。なので、一人でネズミがはい回る中を必死で片付けていました。何日かそんな私の姿を見て、兄弟たちも「あまりにあいつ哀れじゃね」っていう話になったらしくて、ある時仕事帰りにカマールを無理やりタクシーに乗せて一緒に苗木を買いに行きました。「さあオリーブの苗木買うよ」って言って無理やり連れて行って、苗木を買ったらその苗木屋さんでカマールが、「もう美香しょうがねえなあ。オリーブの木もいいけど、俺レモンの木が欲しい」と言われました。そこからようやく、長男のカマールが号令をとれば大体下の三人兄弟は言うことを聞くので、三人の弟たちとカマールの幼馴染が一緒になって瓦礫を片付け始めてオリーブの苗木を植え始めることになりました。こうして「オリーブの木が欲しい、レモンの木が欲しい」と言っている中で、「じゃあ家畜買いたい」って言いだして、「鶏買えば毎日卵食べれるじゃん」って兄弟の誰かが言い出して、「ああじゃあ鶏飼おう、ウサギ飼おう」ってどんどん夢が広がっていきました。その時に初めて「私は実は日本から見知らぬパレスチナの誰かのために使ってください」って言って預かっているお金があるんだよということを兄弟たちに話しました。それまではちょっとずつ借金で賄って兄弟たちが借金を背負って分担してちょっとずつ返していこうと相談していたみたいです。でもその時に私がその話をしたら、なんと言ったらいいんですかね、兄弟たちの目に涙が浮かんで、「ああそんなことってあるんだ。日本の人たちってあったこともない人たちのために思ったり、貸したりしてくれるんだ」ってことで、涙がぶおぉっと瞳に浮かんだというその姿を思い出します。

これは家畜小屋を作ることに決めて、砂利とか砂とかセメントを作るために材料を買ってきた、それを一生懸命作業している、アブー・アリーとジャマール（手前）の写真です。アブー・アリーは本当に工事現場のお兄さん、大工さんなのかな、なんて言ったらいいんですかね、そういう作業ができる人なので、お給料を彼には内緒で払って一生懸命自分の仕事がない時に手伝ってもらいました。セメントを大量にトラックで運んでもらって、大量に支払いを済ませて、ようやく家畜小屋を作る土台ができました。屋上から兄弟たち幼馴染の作業を見守っていたところ、弟たちと幼馴染たちが上に向かって手を振って、「あぁちょっと笑顔戻ってきたな」っていうのがすごくこの日嬉しかった覚えがあります。

とうとうその家畜小屋の土台がひと段落着いたので、オリーブの苗木を植えることになりました。本当は3－4メートル離さないと成長した時に困るし、根をしっかりはらせるためにも、養分もしっかりあるような土や大地が必要ですが、それはちょっと望むべくもないので、本当に実が収穫できるのか、ちゃんと育つのかそういうことはわからないけれど、まあ植えてみようねという話になりました。「まあ枯れてもいいじゃん、また買えば」って思った覚えがあります。お金を出してくださった皆さんには申し訳ないのですが、「まあいいじゃん枯れたって」と思った覚えがあります。にっちもさっちもいかなかったら、植える場所をもう一回考え直そうということで、とりあえず植えました。子供たちの遊び場にもなりました。難民キャンプは狭いので、道路がみんなの遊び場です。トラックとか車が通るたびに遊びを中断しなければいけない、それだけの広さがある庭とか畑とか空いている土地とか公園とかもなかなかないので道路で遊んでいますが、子供たちが集って遊ぶ場にもなったのが嬉しかったです。

マハの話から遠ざかっていますが、この時私たちは毎日農作業をしていました。毎日のお給料がたしか70 シェケルぐらい（当時約 2000 円）だったと思います。三男のジャマールの誕生日会をするということで、ケーキの値段を知らないで「任せておけ」って言ったら、ケーキ屋さんに行ってみたら支払いをする段になってこのケーキが70シェケルだったっていうことで、ものすごい衝撃を受けました。さらにもう一つの衝撃として、私はろうそくを灯すと思っていたら、むこうって花火を誕生日ケーキに灯すのです。ろうそくかと思ったらいきなり花火がぶあぁって上がって、私が「おぉぉ」って驚いてのけぞったのをみんなが笑っていました。

翌年2015年になると、私はネットのニュースでカマールの姿を見つけてしまいました。ネットのニュースで自分の知っている人の姿を見つけるのは衝撃ですね。自分の知っている人が殺されて名前が出てくるのも衝撃ですが、ニュースの写真にカマールの姿が映っているのはすごく衝撃的でした。説明を読むと、カイス・アル・サーディという青年―実はカマールの一番の親友です―、カイスがハマースの戦闘員として何か事件を起こして地下に潜る中でお尋ね者となってカイスの捜索がなされる過程でカイスの家にミサイルの砲弾が撃ち込まれた、ミサイル攻撃をされてずたずたに壊された、焼かれたというようなニュースが一緒に載っていました。カマールがそのカイス、地下に潜って出て来られないカイスの代わりに家の後片付けをしている写真でした。カイスとカマールは、一番冒頭でお話ししたフリーダムシアター、自由劇場で演劇を通して一緒に活動をしてずっと一緒に育ってきた幼馴染であり、親友同士です。その当時はカイスが演出を務める「盗まれた夢」という演劇をカイスが作っていて、それの主演を務めたのがカマールでした。その翌年、カイスは結局お尋ね者となって殺されることはなくてイスラエル軍に捕まって、結局6年の刑期を裁判で課されました。その3年後、2018年に久しぶりにこの一家を尋ねてみた時には、カマールが捕まってしまっていました。ですが、笑わなかったムハンマドにはようやく笑顔が戻りました。結婚をして幸せな家庭生活を得たからです。ただマジドと一緒に働いていたあのトロピカーナというレストランはマジドとの思い出がありすぎて辛くて、そこをやめて新しいお店で働き始めていました。四男のサリームはトウモロコシ屋台で働いていて、2018年に尋ねた時にはレモンの木がこんなに大きくなっていました。子供たちは、カマールの長男のイマード、おじいちゃんの名前を受け継ぎました。次男のハムザも殺された幼馴染の名前を受け継ぎました。オリーブの木もすっかり育っていましたけれども、相変わらずゴミだらけだったので、一人で一生懸命片づけました。ただニワトリはちゃんと増えていて、マハが「毎日毎日ニワトリ餌食い過ぎ」って。カマールが捕まっていていないのでマハが一生懸命世話するしかなかったのですが、「カマール、鶏の餌をやりに早く帰ってきてほしい」と途方に暮れていました。「ニワトリの餌代が大変、カマールが自分で払うって言ったからニワトリも買いだしたのに、あいつ捕まっていないから結局私がニワトリも食わせなきゃいけないのよ」と言ってぼやいていた姿を思い出します。ただ、マハの孫たちは「毎日毎日卵食べられるよ」と言って嬉しそうにしていました。マハは2018年には、近くにある私立のアメリカン大学（富裕層の子供向け）で寮の清掃の仕事を一生懸命していました。毎日10シェケルを払って私と二人分のザアタル（チーズ）が入ったパンを買ってくれます。休憩時間には家から持って行った水とザアタルパンを食べながら、くだらない話をして大笑いしていたこともありました。この日は三男のジャマールが「あまりに仕事終わらない」といって電話すると手伝いに来てくれました。ただ、こうやって笑っている中でも上空ずっとズズズズ、ズズズズとドローンが飛んでいました。この時、アフマド・ナーセル・ジャッラールさんという人が入植者を殺害したという容疑で捜索を受けていました。彼のおじさんの家といとこの家が巻き添えを食って、まだ裁判も行われていないし本人を捕まえてもいない容疑者の段階で、おじさんやいとこの家がこうして巻き添えにあい、「集団的懲罰」として家が壊される。彼のお母さんが暮らしている実家には砲弾が撃ち込まれるというようなことが起きていました。彼は結局、捜索の過程で殺されました。射殺されました。彼の死を悼んで難民キャンプでデモがありました。アフマドのことを忘れないということで、「みんなで彼の遺志を継いでいこう」というデモが起きました。

2018年で一番印象に残っているのが、難民キャンプでごみの収集をしていたところで、近所の男性、向かいに住んでいる男性とか近所の男性もごみを出しに来たところで、ちょうどトランプが国連UNへの拠出金を取り下げるとかそういう話をしていたところだったと思います。ふっとその男性がつぶやいた言葉が

印象的でした。「何も自分たちは好きで難民キャンプで暮らし続けているんじゃない、誰だってこんなところ出ていきたいのはやまやまだ。ただ、他に行くところもないし故郷に帰れるわけでもないからここにいざるを得ないんだ」と。「ただただお金が欲しいんじゃない。ただただ故郷を返してほしい。故郷に帰りたいって言ってずっと願いながら死んでいったお父さんお母さんおじいちゃんおばあちゃんの人生を返してほしい」と彼は言いました。本当に、それが難民たちの望みなのだと思います。別にお金が欲しいわけではないし、補償してくれという訳でもない。補償ももちろん大切ですけれども、ただ認めてほしい、謝ってほしい、故郷に返してほしい、そういうことを訴えている中でそういう声もかき消されていくという現実があります。

最後に、カマールが一年半で刑期を終えて刑務所から出てきて、そのあとようやく待望の娘が生まれました。その娘にはおばあちゃんのマハという名前を名付けたそうです。研究会のテーマでもある、一人一人ちゃんと名前と顔があって人生があって殺された人たちにも生きていた証があるということをお伝えしたいと思い、今日の話を用意しました。なにかあったときにこの今日お話ししたような一人一人の名前と顔をふと思い出してもらえたらそれが私の何よりもの喜びです。どうも長い時間ありがとうございました。

嶺崎：高橋美香さんありがとうございました。それでは岡真理先生、高橋美香さんどうもありがとうございました。

＊＊＊＊＊＊